

熊本大学医学部
における組織評価
自己評価書

平成 30 年 9 月 30 日
5. 医学部

目次

| | | |
|-----|-----------------------|-----------|
| I | 熊本大学医学部の現況及び特徴 | 2 |
| II | 教育の領域に関する自己評価 | 4 |
| | 1. 教育の目的と特徴 | 5 |
| | 2. 優れた点及び改善を要する点の抽出 | 6 |
| | 3. 観点ごとの分析及び判定 | 6 |
| | 4. 質の向上度の分析及び判定 | 11 |
| III | 社会貢献の領域に関する自己評価書 | 12 |
| | 1. 社会貢献の目的と特徴 | 13 |
| | 2. 優れた点及び改善を要する点の抽出 | 13 |
| | 3. 観点ごとの分析及び判定 | 14 |
| | 4. 質の向上度の分析及び判定 | 17 |
| IV | 国際化の領域に関する自己評価書 | 18 |
| | 1. 国際化の目的と特徴 | 19 |
| | 2. 優れた点及び改善を要する点の抽出 | 19 |
| | 3. 観点ごとの分析及び判定 | 20 |
| | 4. 質の向上度の分析及び判定 | 23 |
| VI | 管理運営に関する自己評価書 | 24 |
| | 1. 管理運営の目的と特徴 | 25 |
| | 2. 優れた点及び改善を要する点の抽出 | 25 |
| | 3. 観点ごとの分析及び判定 | 25 |
| | 4. 質の向上度の分析及び判定 | 31 |

I 熊本大学医学部の現況及び特徴

1 現況

- (1) 学部等名：熊本大学医学部
- (2) 学生数及び教員数（平成 30 年 5 月 1 日現在）
 - 学生数 1,341 人（医学科 730 人、保健学科 611 人）
 - 専任教員数（現員数）：307 人（医学科 259 人、保健学科 48 人）

2 特徴

医学部は、学士（医学）教育課程である 6 年制の医学科と、看護学、放射線技術科学及び検査技術科学の 3 専攻を持つ学士（看護学・保健学）教育課程である 4 年制の保健学科の 2 学科で構成される。

医学科は、宝暦 6 年（1756 年）に設立された肥後医育機関「再春館」に始まり、昭和 24 年の国立学校設置法に基づき熊本大学医学部医学科となり、平成 16 年に国立大学法人熊本大学医学部医学科となった。保健学科は、明治 31 年（1898 年）に設立された熊本医学校看護学講習科に始まり、昭和 51 年に熊本大学医療技術短期大学部となり、平成 15 年 10 月に医学部に統合され、医学部保健学科となった。

近年の医療の高度化・専門化により、医療人には高度な専門的知識や技術の修得とともに、豊かな人間性、高い倫理観、生命の尊厳への認識が求められている。

医学科は、長い歴史と伝統を有し、日本全国のみならず世界各地において医学医療の発展向上に寄与している。また、卒業後に医師となる医学士を養成する医学教育組織であるため、より強い倫理観に基づき、自浄能力を堅持した相互批判精神に裏打ちされた活力を持った組織である。教育実践を行う教員はヒト（人間）に対するあらゆる分野の生命科学研究を行う研究者であることが前提であり、担当する教育科目に関する最高水準の研究を行うことによって、絶えず教育者としての資質向上を目指している。医学生が誇りと自信を持って学び成長する組織であるとともに、医学生を支える教員と教務担当職員が一丸となって活動している。

従来の講座がイコール学科目担当講座という制度から脱皮し、履修すべき教科目を基にして、複数の分野が担当可能な制度を採用したので、教育内容・カリキュラム等を柔軟に改訂・改善できると共に、一つの学科目に対して様々な視点から教授できるようになっている。また、最新の研究内容の紹介や診療スタイルにより近い実践的臨床教育を含む幅広いカリキュラムを特徴とし、誠実で人間的バランスのとれた医師を育てる教育を実践している。

保健学科は、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の教育・研究を通し、保健・医療・福祉分野の発展に寄与している。保健学の基礎を教授する教育機関として、学生に幅広い教養と社会的視野、自ら問題を見出し解決していく能力や自立的で主体的な判断力、国際化社会に対応して諸外国との情報交換や学術交流の推進に貢献できる能力、さらには医療を通じて国際貢献できる能力を身に付けさせる教育を実践している。また、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の 3 専攻を持つ強みを活かし、高度なチーム医療を推進できる医療人の育成にも取り組んでいる。

一方、医学部を担当する教員は、平成 22 年に大学院医学薬学研究部から発展的に改組された大学院生命科学研究部に所属し、共同研究等を通して医学系・薬学系・保健学系教員の連携を強めている。また、教育面においては附属病院がある強みを活かし、附属病院

職員との連携により教育研究を効果的に実施することができる。医学部を担当する教員は、学生の人材養成に加え、これら生命系との連携により専門性をより深め、その専門的な知識は学会等を通して各学問分野の発展に資するとともに、講演会等を通して一般社会へ専門知識を還元している。

3 組織の目的

医療・保健を取り巻く社会情勢が急激な変化を遂げる中、医学部は、研究を通して得られた専門的知識を社会に還元するとともに、将来、医師・医療技術者として、専門分野の発展に寄与することができる人材の育成を目的としている。

人材の育成に関して、学則第1章総則、第1節目的第1条には、「教育基本法及び学校教育法の精神に則り、総合大学として知の創造、継承及び発展に努め、知的、道徳的及び応用的能力を備えた人材を育成することにより、地域と国際社会に貢献するもことを目的とする」と詠っている。

医学科は、「豊かな人間性と高い倫理観を持ち、医学およびその関連領域における社会的な使命を追求、達成しうる医師・医学者を育てる」を使命と定めており、医学科組織の目的は、この使命を達成することである。具体的には、アドミッションポリシーとして、1. 病める人たちやその家族の気持ちを理解できる人、2. チーム医療の中心的役割を果たすための優れた協調性を持つ人、3. 地域医療に関心を持ち、地域住民の健康増進に貢献する意欲を持つ人、4. 科学的探究心が旺盛で、国際的視野で医科学研究を展開する意欲に溢れる人、5. 社会に対する幅広い視野を有し、地域や国際社会における保険医療や福祉に深い関心をもつ人、6. 日々進歩する医学や医療の最新知識を吸収できる基礎学力を持ち、生涯にわたって自己学習を継続できる人を医学生として求めている。さらに、卒業する際に獲得しているべき能力をコアとなる7項目とそれぞれの下位に属する総計50の小項目からなる教育成果として明文化し、カリキュラムポリシーとして、卒業時には全ての教育成果を獲得できているようにカリキュラムを編成し、獲得した者に学士（医学）を授与することをディプロマポリシーとして明記している。

保健学科は、医療生命倫理を含めた豊かな教養、ならびに医療を取り巻く環境の変化に対応しうる高度な専門的知識・技術を備え、医療チームの一員として、疾病の予防、地域住民の健康の保持・増進、さらには生活の質向上に広く貢献できる医療者・研究者・教育者を育成することを目的としている。

Ⅱ 教育の領域に関する自己評価

1. 教育の目的と特徴

医学科では、「豊かな人間性と高い倫理観を持ち、医学およびその関連領域における社会的な使命を追求、達成しうる医師・医学者を育てる」ことを熊本大学医学部医学科の使命としている。

具体的には、アドミッションポリシーとして、1. 病める人たちやその家族の気持ちを理解できる人、2. チーム医療の中心的役割を果たすための優れた協調性を持つ人、3. 地域医療に関心を持ち、地域住民の健康増進に貢献する意欲を持つ人、4. 科学的探究心が旺盛で、国際的視野で医科学研究を展開する意欲に溢れる人、5. 社会に対する幅広い視野を有し、地域や国際社会における保険医療や福祉に深い関心をもつ人、6. 日々進歩する医学や医療の最新知識を吸収できる基礎学力を持ち、生涯にわたって自己学習を継続できる人を医学生として求めている。さらに、卒業する際に獲得しているべき能力をコアとなる7項目とそれぞれの下位に属する総計50の小項目からなる教育成果として明文化し、カリキュラムポリシーとして、卒業時には全ての教育成果を獲得できているようにカリキュラムを編成し、獲得した者に学士（医学）を授与することをディプロマポリシーとして明記している。さらに、教育成果を獲得するため、医学科の講義・実習がどのような役割を果たしているかを明示した「教育成果と講義・実習との対応表」を作成し、教員、学生双方が、各講義および実習が、教育成果のどの項目に該当するかを把握できるようにしている。

医学科の特徴は、将来国内外の医療を担う医師・医学研究者を養成することにある。医学科の所定の課程を履修して取得できる資格は、医師国家試験受験資格であり、卒業後は医師国家試験に全員合格し、優秀な医師や医学者の道に進むことができる学士（医学）を養成できている。具体的には、医学研究への取り組みを早期から体験するための基礎演習、医療への取り組みの心を涵養するための早期臨床体験実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、チュートリアル教育、ローテーション臨床実習、特別臨床実習（診療参加型クリニカルクラークシップ制）の体験型実習が多く組み込まれている。これらの体験型実習においては学生が主体的に取り組むように工夫がなされている。特に早期臨床体験実習Ⅱ、ローテーション臨床実習、特別臨床実習においては、医学部附属病院内の全ての診療部門、診療科が実習場所の提供、医学科学生指導・評価に参加協力しており、このことは医学科学生教育の中での大きな特徴と言える。医学科での座学で培われた知識を実際に活用できる医学科学生に育てていく過程で役割を十分に果たしているものと言える。

保健学科は、看護学専攻・放射線技術科学専攻・検査技術科学専攻の3専攻からなり、医療生命倫理を含めた豊かな教養、ならびに医療を取り巻く環境の変化に対応しうる高度な専門的知識・技術を備え、医療チームの一員として、疾病の予防、地域住民の健康の保持・増進、さらには生活の質向上に広く貢献できる医療者・研究者・教育者を育成することを基本理念としている。この理念のもと、6項目からなる3専攻共通の教育目標を設定するとともに、看護学専攻で5項目、放射線技術科学専攻で6項目、検査技術科学専攻で7項目の教育目標もそれぞれ設定している。

保健学科の特徴として、所定の課程を修了すれば国家試験受験資格を取得できることが挙げられる。看護学専攻では看護師国家試験受験資格・保健師国家試験受験資格・助産師国家試験受験資格、放射線技術科学専攻では診療放射線技師国家試験受験資格、検査技術科学専攻では臨床検査技師国家試験受験資格が取得できる。また、看護学専攻においては、保健師免許取得後に都道府県の教育委員会に申請すれば、養護教諭二種免許状が取得できる。

[想定する関係者とその期待]

医学科では、想定される関係者として、在学生、教職員の他に、医療機関関係者や患者及びその家族、更には地域住民を含め社会全体を対象とし、豊かな人間性と高い倫理観を持ち、医学およびその関連領域における社会的な使命を追求、達成しうる人物を養成する

ことが期待される。

保健学科では、想定される関係者として在学生、教職員の他に、医療機関関係者や患者及びその家族、更には地域住民を含めた社会全体を対象とし、豊かな人間性と高い倫理観を持ち、医学・保健学、およびその関連領域における社会的な使命を追及、達成しうる人物を養成することが期待される。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

(医学科) 医学科の教育は、卒業後に医師・医学研究者として第一歩を歩む上での最低限の知識・技能・態度を獲得できるカリキュラムである。特筆すべき医学科の特徴として、基礎研究の基盤を早期から培うプログラムである柴三郎プログラムを構築し運用するなど、全国的にも不足している医師の資格を有する基礎医学研究者の育成にも力を入れている。

医学教育の国際認証の受審・獲得に向けた準備委員会を立ち上げ、具体的な作業に着手し、平成 31 年度の受審に向けて万全の準備を進めている。

(保健学科) 保健学科の教育は、標準的なカリキュラムであり、卒業後に看護師・保健師・助産師・診療放射線技師・臨床検査技師、および医学研究者として活動する上での最低限の知識・技能・態度を獲得できるものであると考えられる。いずれの専攻においても、高い国家試験合格率と就職率を維持していることから、現状の教育内容は一定の成果を挙げているものと考えられる。

また、平成 30 年度から、チーム医療の質的向上を目的として、従来 4 年次に開講していた 3 専攻合同のチーム医療演習に加え、新たに「保健学概論」も開講することとした。

【改善を要する点】

(医学科) 本邦での大学医学教育においては、国際的な医学教育の質保証が求められており、医学教育分野別認証評価制度がスタートしている。その中でも特に臨床参加型臨床実習の推進と臨床実習期間の延長の必要性が問われており、平成 28 年度には「診療参加型臨床実習」を、平成 29 年度には「医学教育分野別認証評価受審に向けて」をテーマとして医学教育 FD ワークショップを実施した。これらの成果を踏まえて、カリキュラム企画・評価委員会において具体的な臨床実習スケジュールを作成し、平成 30 年度から新カリキュラムでの診療参加型臨床実習の導入を行うこととしているが、今後は新たな診療参加型臨床実習の教育効果について評価する必要がある。

(保健学科) 先述の如く、新たに「保健学概論」を開講するなど、チーム医療の質的向上に向けた教育改革に取り組んではいるものの、現状まだ志半ばの状態である。今後もチーム医療をテーマとした FD セミナーの実施など、積極的な取り組みを継続して行っていく必要がある。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 教育活動の状況

| |
|-----------|
| 観点 教育実施体制 |
|-----------|

(観点に係る状況)

(医学科) 医学科は、単一専攻科であり独自性のある教育組織を構成するとともに、専門科目は教員が協力体制を組み、学士課程における教育目的が達成できる構成としている。医学科の教育を担当する教員は生命科学研究部の教員組織または医学部附属病院に属し、専門基礎科目、基礎医学科目（分子細胞生物学、生体構造学、生体機能学、感染免疫学、

病態学、社会医学、総合医学）と臨床医学科目（内科学、外科学、成育医学、感覚・運動科学、脳・神経・精神科学、総合医学）さらに医療情報学や漢方医学などを他学部、学内共同教育施設等の協力で、それぞれ連携をとりながら高度な専門知識を医学生に対して教育している。なお、1、2年次の教養教育は大学教育統括管理運営機構の統括の下で実施している。

また、医学科においては教育に係る活動は教育・教務委員会が役割を担い、毎月一回開催し、必要に応じて臨時で開催している。審議事項は、教育課程の編成及び授業に関する事、学生の修学指導に関する事、学生の入学、退学、転学、休学、復学、転部及び卒業に関する事、科目等履修生に関する事、その他教務に関する事である。教育活動に係る重要事項は教育・教務委員会で審議した後、医学科会議及び、医学部運営会議で審議し、最終的な決定を行っている。

入学者選抜に関しては、平成 22 年から地域医療を担う医師の確保と養成のために推薦入試の中に地域枠を導入し、また、前期日程については、平成 26 年度入試から医師となるために必要な適性や将来性なども重視するために面接試験を導入するなどの改革を行ってきた。さらに平成 28 年度から後期日程を行わないこととした。

（保健学科）保健学科の教員組織は、看護学、および放射線技術科学専攻と検査技術科学専攻で構成される医療技術科学の 2 講座となっている。さらに、看護学講座は 5 分野（基礎看護学・看護教育学・臨床看護学・母子看護学・地域看護学）、医療技術科学講座は放射線技術科学専攻 2 分野（医用理工学・医用画像学）と検査技術科学専攻 2 分野（構造機能解析学・生体情報解析学）にそれぞれ分類されている。

平成 29 年度時点での専任教員数は、看護学専攻 25 名、放射線技術科学専攻 12 名、検査技術科学専攻 14 名の計 51 名（男性 26 名、女性 25 名）で、第 2 期中期目標期間終了時より 6 名減となっている。（資料 A-1-1-4）全教員数に女性教員が占める割合は約 49.0% である。また、専任教員の年齢構成分布は、25～34 歳 4 名（7.8%）、35～44 歳 12 名（23.5%）、45～54 歳 15 名（29.4%）、55～64 歳 20 名（39.2%）である。

学生の自主学習環境としては、保健学科内に自習室（A201a・A201b・A201c）、第一情報演習室（A204：パソコン 48 台設置）、第二情報演習室（B201：パソコン 32 台設置）と保健学図書室（C302）、学生閲覧室（C309）がある。保健学科棟には無線 LAN の環境も整備されており、学習しやすい環境となっている。

教育課程の編成や授業科目に関する事は、毎月開催される教務委員会での検討を経た後、保健学科会議・医学部運営会議で審議、議決している。（中期計画番号 11）

教職員側の指導能力、及び教育活動を評価する方法としては、「授業改善のためのアンケート」調査を有効活用している。集計されたアンケート結果をもとに、各教員が自己の教育の質、問題点を分析し、授業の改善に役立てている。また、毎年 5 回以上の FD セミナーを継続的に実施するとともに、教員間での授業参観も実施し、意見交換することで、教育の質向上につなげている。

入試に関しては、平成 26 年度から平成 29 年度の入試倍率は、いずれも大きな変化はないが、平成 30 年度入試からは後期日程を廃止し、推薦枠を広げることで、これまで以上に意欲と熱意のある学生を獲得できるよう努めている。

保健医療系基礎科目や各専攻の専門科目を開放科目とし、社会人教育にも力を入れている。平成 26 年度と平成 29 年度には、研究生や科目等履修生も受け入れた。

（水準）

期待される水準を上回る。

（判断理由）

（医学科）教育・教務委員会および医学科会議の取り組みや活動は良好であり、一定の成果が得られ、医学科の組織で想定する関係者の期待に応えている。また、医師国家試験の

合格率は平均的であるが、学生の講義や実習における態度も向上し、学問的自由と自律的行動を尊重しつつ、医学生として必要不可欠な教育は提供されている。

(保健学科)「授業改善のためのアンケート」の有効利用や、教員間での授業参観とその内容に関する意見交換を行うことにより、教育の質保証に努めている。教員の定数削減によるマンパワー不足には、3専攻合同講義を増やす、学内非常勤講師を増やす、などの工夫を凝らし、何とか対応している。

| |
|--------------|
| 観点 教育内容・教育方法 |
|--------------|

(観点に係る状況)

(医学科)

教育カリキュラム

医学科学生の基本的なニーズは、良き医師および優れた医学者になるための基礎能力を6年間で身につけ、医師国家試験に合格することである。教養教育は人格形成およびプロ意識確立、さらには豊かな人間性と広い社会性を身に付けるために不可欠な履修科目として位置付けており、教養教育実施を重要視しており、医学科学生は、1年次は週3日、2年次は週1日、教養教育を履修している。

また、医学科専門科目はすべてが必修科目となっており、1年次には主に専門基礎科目、基礎医学科目の講義・実習を履修する。また1年次後期に早期臨床体験実習Ⅰを学外の老健施設などの医療施設にて行い、医学・医療を学ぶ動機を高め、その重要性を認識させている。2年次は、主に専門基礎科目、基礎医学科目の講義・実習を履修する。また早期臨床体験実習Ⅱを実施し、熊本大学医学部附属病院での見学実習を行う。3年次前期は、研究室配属実習である基礎演習を行い、医科学研究の立案と実施を指導教官のもとで行う。後期からは臨床医学科目を履修する。また早期臨床体験実習Ⅲを実施し地域医療を担う医療機関での実習を行う。4年次前期には、臨床医学科目の講義を履修し、後期にはチュートリアル実習、臨床実習入門コース、共用試験(CBT、OSCE)を経て、臨床実習が開始となる。29週間のポリクリローテーションの後、1ターム3週間、15タームのクリニカルクラークシップに臨み、診療参加型臨床実習を行う。このローテーション臨床実習は医学部附属病院で行われており、生命科学部医学系臨床分野教員、附属病院教員の多大な協力のもとに実施されている。平成29年度からは「教育医長制度」を設け、臨床実習の質を高める取り組みを行っている。特別臨床実習(クリニカル・クラークシップ)は、基本は附属病院診療科での実習となっているが、診療科によっては実習効果を高めるために、附属病院診療科と連携の深い県内外の病院での実習も行っている。

・カリキュラムの検証

医学部医学科におけるファカルティ・ディベロップメント(FD)は、教員の他、研修医及び医学科学生の参加も得て、医学教育ワークショップとして年1回行われている。FDで取り組む内容は、医学科カリキュラムや医学教育全般であり、その成果は、カリキュラム企画・評価委員会、教育・教務委員会及び医学科会議において報告されるとともに、実際に医学科の教育に取り入れる内容については、前記会議において更に検討し、審議のうえ、実行に移している。

・授業内容

医学部医学科では、卒業要件に必要な249単位は講義、演習、実験、臨床実習等で構成されている。基礎科目は講義中心であるが、基礎科目から臨床科目に進行するに応じて、チュートリアルなどの時間を積極的に導入し、講義と演習あるいは実験、臨床実習を組み合わせた効果的な学習指導を実現し、医学知識を得た後、学生が体験学習できるような授業形態を配慮している。また臨床部門においては、早期より学外の医療施設などでの臨床体験ができるよう工夫している。基礎関連の講義では大人数のものが多く、チュートリアル実習などは、少人数ごとにグループワークを組み入れて討議・発表の時間を設け、知識を自分の体験におきかえられるよう工夫を行っている。

なお、医学科のカリキュラムにおいては、医学教育のガイドラインとして示されている「医学教育モデル・コア・カリキュラム」を基本にしながら、適宜大学及び教員の判断で、生命科学および医療関連領域の諸研究の最新の知見を学生に提示している。

・授業内容の検証

全学的に実施されている「授業改善のためのアンケート」は、医学科でも授業終了1回前の授業の最後に実施している。その他、医学科では各授業科目終了時点で、学生による授業評価を実施するように授業担当者に働きかけている。アンケートに対しては、担当教員からの意見改善策を提示している。

・特色ある教育プログラム

文部科学省の「基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成」事業に採択されたプログラムで、基礎研究の基盤を早期から培う「柴三郎プログラム」を構築している。これは医学教育において基礎医学研究マインドを持った人材を輩出することを目的としたプログラムで、高校生から生物・医学研究に興味を持つ人材を発掘・育成し（柴三郎 Jr. の発掘）、その後医学部学生時代（プレ柴三郎コース）から大学院修了（柴三郎コース）までシームレスに研究ができる環境を与え、研究の指導・支援するものである。医学部学生を対象としたプレ柴三郎コースでは、柴三郎コースへ進学を希望する学生を選抜（5～10人）し、研究室での研究活動に加え、学部4年次から科目等履修生として大学院講義の聴講を可能とし、単位を早期取得できるシステムを導入している。

また、3年次に早期臨床体験実習 III を導入し、地域医療を担う医療機関での実習を通して、地域医療について学ぶ機会を提供している。（中期計画番号5）

（保健学科）

保健学科の専門教育は、専門基礎科目と専門科目の2つで構成されている。このうち専門基礎科目では、各専攻単位での専門基礎科目に加え、3専攻共通の保健医療系基礎科目も設けており、専門科目としての「3専攻合同チーム医療演習」の充実につなげている。さらに、1年次から教養教育、専門教育を並行して実施し、early medical exposure を実現させている。

シラバスは、保健学系 FD 委員会、教務委員会を中心に適宜見直しを図っており、講義を中心とした座学の内容が、実験・実習・演習に最大限生かされるよう、常に工夫している。

（中期計画番号 11）

国際的視野をもった医療人の育成を目標に、3専攻共通の保健医療系基礎科目「国際医療・保健活動論」を、また保健学研究手法の基礎を習得するための「リサーチトレーニング」をそれぞれ必修としている。

（水準）

期待される水準を上回る。

（判断理由）

（医学科）医師国家試験の合格率は全国平均の水準である。また、学生の講義や実習における態度も向上しており、学生の学問的自由と自律的行動を尊重しつつ、医学生として必要不可欠な教育が提供されている。さらに、教育課程も教育の目的に照らして体系的に編成されている。

（保健学科）3専攻ともに、学生の講義や実習における態度は向上しており、このことが各種国家試験合格率、あるいは就職率の高さにつながっている。学生の学問的自由と自律的行動を尊重しつつ、保健学科の学生として必要不可欠な教育は提供されている。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

(医学科) 医学科では全学的方針に準拠して、厳格で公正な成績評価を行った上で単位認定を行っている。教育内容の質は医学教育モデル・コア・カリキュラムを基本にした教育内容の確保、学生による授業評価アンケートによる授業改善、厳格な出欠席チェック、そして学生の科目習得度を適格に測定できる試験を行うことによって維持している。また、講義のみでなく、基礎医学では実験、臨床医学においてはチュートリアル、臨床実習、特別臨床実習においても教育達成度が十分に反映する形の単位認定を行っており、様々な側面から単位の実質化に配慮している。

卒業予定者については、卒業試験の結果について卒業判定会議にて学士(医学)を授与するに値するか厳正な基準の下、評価している。新卒者の医師国家試験合格率は年度によっては変動があるものの、これまでより上昇し95%程度となっている。

(保健学科) 保健学科では、厳格で公正な成績評価を行い、学生の科目習得度と教育達成度を把握しながら、教育を提供している。講義・演習だけでなく、実習も「授業改善のためのアンケート」の対象としているが、保健学科が施す教育に対する学生の評価は全般的に良好である。(中期計画番号11)

4年での修業率は、平成26年度で87.7%、平成29年度で90.6%と第2期中期目標期間よりも高い数値となっている。(資料A-2-1-3) また、平成26年度から平成29年度までの国家試験の平均合格率は、看護師99.7%、保健師100%、助産師98.1%、診療放射線技師93.2%、臨床検査技師で93.0%と、全国平均と比べても高い数値を残している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 医学科の教育は、「医学教育モデル・コア・カリキュラム(教育内容ガイドライン)」に基づいており、効果的な教育内容となっている。その成果として、医師国家試験の合格率については全国平均の水準を維持している。

(保健学科) 保健学科が施す教育に対する学生の評価は全般的に良好であり、その成果が、4年での修業率のアップ、高い国家試験合格率、就職率の維持につながっている。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

(医学科) 医学科の学生は、卒業後全員が医師国家試験を受験し、合格すると医師となり、2年間の初期臨床研修を行うことになっている。初期臨床研修後は医学部附属病院やその他の病院に就職するコースと、大学院に進学するコースが用意されている。また就職しても社会人大学院生として研究活動を行うこともできる。

医学科の特徴として、医学生は全員医師となる単一職種を目指す集団であり、就職活動等はしていないので、卒業(修了)生や、研修先等の関係者からの意見聴取は組織的には実施していない。

(保健学科) 平成26年度から平成29年度までの卒業時の進路決定率は、看護学専攻で97.8%、放射線技術科学専攻で93.9%、検査技術科学専攻で91.7%と高い数値を示している。詳細をみると、第2期中期目標期間に比べ大学院への進学率が増えているのが特徴である。放射線技術科学専攻と検査技術科学専攻では本学の保健学教育部への進学が最も多く、看護学専攻では特別別科への進学が多い。一方、就職先としては、熊本県内、あるいは九州・沖縄地区の国公立や民間の病院、県市職員、企業が目立つ。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 近年卒業し、医師国家試験に合格した卒業生は、ほぼ全員初期臨床研修を行っており、研修終了後は、附属病院をはじめ、県内外の医療機関で医師として活躍している。

(保健学科) 高い国家試験合格率、就職率を維持しており、卒業生の多くが県内外の保健医療機関で医療人として活躍している。また、大学院への進学者も増加している。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

高い質を維持している。

(医学科) 重要な質の変化あり。教育活動について、熊本大学医学部医学科では従来の教育組織の元、医学教育モデル・コア・カリキュラムの項目を網羅したカリキュラムを構築し、教育活動を実施している。また、基礎研究の基盤を早期から培い、基礎医学研究マイノリティを持った人材を輩出することを目的とした柴三郎プログラムを構築している。また、本邦において医学教育に求められている成果基盤型医学教育の導入に対応するため、平成26年度に熊本大学医学部医学科の教育成果を策定している。さらに診療参加型臨床実習の充実と拡充を達成するため、新カリキュラムの構築を行い、その中での臨床実習の充実拡充を図っている。

以上から教育活動の状況についての質の向上度は、改善、向上していると判断する。

(保健学科) 保健学科のカリキュラムは、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の各分野の学問体系を基盤とし、看護師・保健師・助産師・診療放射線技師・臨床検査技師の国家資格取得に向けた科目群で構成されている。総合医科学の知識を身に付けた、質の高い医療人を育成するために、専門基礎科目の中に3専攻共通の保健医療系基礎科目を設けており、専門科目としての「3専攻合同チーム医療演習」の充実につなげている。また、1年次から教養教育、専門教育を並行して実施し、early medical exposure を実現させている。さらに、臨床実習では、医療現場での実践能力の育成に取り組んでいる。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

改善、向上している。

(医学科) 教育成果について、学生の評価は厳格な基準のもと、進級や卒業を判定している。卒業後の国家試験合格率についても、数年前はやや低下傾向を示したが、平成29年度卒業生の国家試験合格率は96.2%と高水準を達成できた。本学卒業した国家試験合格者はすべて初期臨床研修を行っている。

(保健学科) 厳格で一貫した基準のもと、進級や卒業を判定している。4年での修業率のアップ、高い国家試験合格率、就職率の維持、さらには大学院への進学率のアップが示すように、現状の保健学科の教育は、高い質を維持していると考えている。

Ⅲ 社会貢献の領域に関する自己評価書

1. 社会貢献の目的と特徴

(医学科) 本学の地域社会との連携に係る基本方針に則り、医学科では、社会とくに地域社会から期待される医師・医学者を育成することを目的として教育活動を行っている。また、地域の教育および文化の向上・発展や多様な分野における人材育成などに寄与することを目的として、学生以外の社会人に対して授業開放を実施している。さらに、地域の学校教育へ貢献し、地域社会の若手人材、とくに将来、医療や医学・生命科学分野で活躍する人材を育成することを目的として、高大連携事業の推進、中・高校生に対する学内施設開放、柴三郎プログラムによる中高生の医学・生命科学研究の指導や教育などを行っている。

(保健学科)「熊本大学の地域社会との連携に係る基本方針(平成25年1月17日学長裁定)」に基づき、医療に対する地域社会からの要請を的確に把握し、看護学、検査技術科学、放射線技術科学分野における研究成果の公開や人的交流を通して、質の高い医療の提供と発展に貢献すること、また、これらに貢献できる医療専門職者・教育者・研究者の育成を目的としている。

保健学科の特色を生かし、以下の取り組みを通して、地域に開かれた大学としての役割を果たす。

[想定する関係者とその期待]

(医学科) 社会貢献の関係者とその期待は、以下のとおりである。

① 社会から期待される医師・医学者を育成することを目的とした教育活動

国民、地域社会の人々、自治体および地域の医療機関が主な関係者である。国民の健康と福祉の増進に貢献すること、地域医療を支えること、離島・僻地医療に従事することなどが期待されている。

② 地域の教育および人材育成に寄与することを目的とした授業開放や社会貢献活動

想定する関係者は、地域社会の人々である。地域社会の人々が、学生と一緒に勉強することで生涯学習意欲の刺激につながったり、生命科学の専門的な教養を深めたりすることが期待されている。

③ 地域の学校教育への貢献を目的とした活動

想定する関係者は、地域の中学・高校生とその保護者、ならびに中学・高校教育関係者。中学・高校生の医学・生命科学に対する知的好奇心を刺激し、学習への意欲を高めることが期待されている。また中学・高校生の進路決定に役立てることが期待されている。

(保健学科) 保健学科で想定される関係者としては、本学科の卒業生を含む看護師、保健師、助産師、診療放射線技師、臨床検査技師の国家資格取得者、医療を受ける患者及びその家族、地域住民、保健医療福祉関係者、などが挙げられる。

本学科の卒業生を含む看護師、保健師、助産師、診療放射線技師、臨床検査技師等の国家資格取得者からは、医学・医療の発展に伴う新たな情報の提供や技術の開発が期待されている。

医療を受ける患者及びその家族、地域住民、保健医療福祉関係者からは、質の高い医療の提供に向けた医療技術の開発や地域住民への医療・医学・健康に関する教育、地域における保健医療福祉の課題を解決するためのケアモデルの構築が期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

(医学科) 柴三郎プログラムは、本学独自の教育プログラムであり、中・高校～大学～大学院まで一貫して医学・生命科学研究の実践と指導により、将来我が国の医学・生命科学研究を担う研究者(医師)を養成することを目的とする。本プログラムを通じて、地域の

中学・高校生に医学ならびに生命科学研究を放課後や休日に実践させ、研究指導を行っている。文部科学省が取り組んでいるスーパーサイエンスハイスクール (SSH) やサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト (SSP) プログラムと比べて、より深く、長時間研究に取り組むことができる特色がある。また、医学部の各研究室に配属し、研究をマンツーマンで指導していることに加えて、その研究成果を学会や論文発表することも指導し、積極的に成果発表することを推進している。参加した高校生からの評価も良好である。

このような本プログラムの取り組みは、他に類を見ない社会貢献活動である。

また、高校生がより医学・生命科学研究に興味をもつよう「ワクワク研究室訪問」を実施し、平成 28 年度は 5 人、平成 29 年度は 2 人を各研究室で受け入れ社会貢献活動を実施している。

さらに、医学科の学生に対しては、社会から期待される医師・医学者を育成すること目的とした教育活動を実践する意味で、地域医療現場でのニーズを知り、将来地域医療で働く人材を育成するために「早期臨床体験実習」を拡充し、将来の地域医療の現場で活躍できる人材の育成に努めている。

(保健学科) 外部資金を確保し、自治体、国内外の研究機関・医療機関、医療技術者養成機関と連携した事業の展開を行うことで、医療技術の開発に貢献している。また、公開講座、授業開放などを通して地域住民の健康指導に貢献するとともに、地方自治体等の審議会、委員会への参画や、国内外の研究機関等との連携を通しての看護ケアモデルの開発に貢献している。

【改善を要する点】

(医学科) 地域の人々に対して、公開授業として授業の開放を行っているが、提供している授業数が十分であるかどうかのニーズをくみ取れていない。また、地域の人々が聴講を希望している授業の調査を行っておらず、本医学科からの一方向性の提供に留まっている。地域貢献活動を学内外へアピールする方法を新たにとる必要がある。

(保健学科) 授業開放を行い、地域住民への医療・医学・健康に関する教育を行っているが、提供している授業数はまだ少ない。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 目的に照らして、社会貢献活動及び地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点 社会貢献活動及び地域貢献活動の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が適切に公表周知されているか。

(観点到る状況)

(医学科) 社会貢献及び地域貢献活動の目標は、教育および文化の向上・発展や多様な分野における人材育成などに寄与すること、ならびに地域の学校教育へ貢献し、地域社会の若手人材、とくに将来、医療、医学・生命科学分野で活躍する人材を育成することである。本目標を達成するために、まず、高大連携事業、中・高校生に対する学内施設開放、柴三郎プログラムによる中高生の医学・生命科学研究の指導や教育を計画した。さらに、医学科教育・教務委員会ならびに医学科会議が中心となり、医療と社会、早期臨床体験実習などを計画した。また、公開講義を実施すると共に、本学が実施する高校生のためのワクワク連続講義を担当した。(中期計画番号 33)

これらの計画は、熊本大学 Web サイトなどで公表し、オープンキャンパスに出席した高校生等に対しても説明した。また、これらの活動を、適宜パンフレットやチラシを作成し、地域住民や中・高校生に配布し、公表・周知に努めた。さらに、地域の中学校、高等学校に出向き、柴三郎プログラムや授業開放などの医学科が行っている地域貢献活動について説明し、参加を促している。(中期計画番号 33)

(保健学科) 国内外の研究機関や産学官連携の強化を進め、教育研究の成果を社会へ還元するという基本的な考え方を全教員が共有し、その実現に向けて積極的に取り組んでいる。大学の基本計画による活動は大学の Web サイトで、また保健学科の教育・研究・社会貢献活動に関する内容は保健学科 Web サイトや生命科学研究部概要において、それぞれ公表、周知している。また、教育理念・目標などをオープンキャンパスに出席した高校生等に対して説明している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 地域社会から期待される医師・医学者を育成することを目的として定めており、医学科学生への地域での早期臨床体験実習や地域の高校生に対しての講義や研究室の訪問などを計画・実施している。その詳細については Web サイトなどを介して広く公開し、オープンキャンパス等で直接説明している。

(保健学科) 熊本大学の基本方針に沿って社会貢献がなされており、関係者からの期待に応える成果を挙げている。また、社会から期待される医療従事者を輩出することで、地域住民の期待に応えている。併せて、教育・研究・社会貢献活動については、大学並びに保健学科の Web サイトや生命科学研究部概要によって、きちんと公表、周知している。

| |
|---------------------------|
| 観点 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。 |
|---------------------------|

(観点に係る状況)

(医学科)

早期臨床体験実習などを実施し、地域の心身障害児施設、慢性疾患療養施設、老人保健施設などで実習を行い、患者や住民の側から医療・福祉をみる体験をさせることにより、社会に貢献する医師像の理解が深まるように努めた。(中期計画番号 31)

また、講義を地域の人々に対して公開し、さらに、高校生に対する熊大ワクワク連続講義を担当し、本学学生以外の社会人や高校生に対して教育を行った。柴三郎プログラムとしては、平成 24 年度以降にこれまで 90 名以上の高校生を研究室に受け入れ実習を行っている。これらの取り組みと併せて、平成 27 年度や平成 29 年度にオープンキャンパスを実施し、教育理念・目標などについて説明を行った。

(保健学科) 国内外の研究者との共同研究や、産学官連携の研究を通して得られた成果をもとに、地域の課題解決に向けた看護ケアモデルの構築や新たな画像診断技術の開発、遺伝性疾患に対する診断技術の考案、確立に取り組んでいる。地域社会との組織的な連携強化が図られたことを示す一つの判断材料として、本学科の教員が務める公的機関の審議員・委員会の委員数が増加傾向にあることが挙げられる。(中期計画番号 32)

さらに、地方自治体や関連機関との連携を図りながら、講演会や研修会を毎年継続的に実施している。その内容は、地域の問題解決につながるテーマや、最新の専門知識の提供など多岐にわたる。また、高大連携の観点から、高校生に看護学、診療放射線技術科学、臨床検査技術科学を理解して貰うための出前授業も行っている。(中期計画番号 33)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 社会貢献活動は、授業計画書に具体的に明示した目標と計画に基づいて適切に実施しており、国民や自治体からの期待に応えている。

(保健学科) 目標と計画に基づいて適切に実施しており、地域住民や自治体からの期待に応えている。

地方自治体や関連機関との連携による講習会・研修会については、単発に終わらず、継続的に取り組むことができている。その結果として、地域との連携がより深まり、単なる知識・技術の提供に留まらず、地域の問題解決につながる内容の提案もできている。

観点 活動の実績及び活動への参加者等の満足度等から判断して活動の成果が上がっているか。

(観点に係る状況)

(医学科) 毎年約 100 名の医学士を輩出し、輩出した医学士が医師や研究者として、国民や地域社会の人々の健康と福祉の増進に貢献している。

高校生のためのワクワク連続講義では、講義終了後の聴講生に対するアンケート調査で、ほぼ全員から満足であったとの回答を得た。講義を公開している授業開放においても参加者からは、概ね満足であるとの回答を得ている。また、柴三郎プログラムにおける地域貢献活動では、参加者全員から満足しているとの回答を得ており、その結果、参加希望の中・高校生が毎年増加している。また、外部評価委員から高い評価を得ている。(資料 C-1-3-2) 毎年度実施しているオープンキャンパスの参加者から概ね満足であるとの回答を得ている。

(保健学科) 社会との連携を深めるための取り組みとして、研究成果を熊本大学リポジトリや紀要に公表するとともに、授業開放や講演会、セミナー、公開講座、研修会、研究会を主催し、知的財産を活用した地域貢献を積極的に図っている。特に、授業開放数は、平成 26 年度の 4 件から、29 年度には 8 件まで倍増している。また、教員へは、地域からの講演会やセミナー、公開講座、研修会での講師の依頼が年々増えている。特に、セミナー、研修会への講師依頼については、第 2 期中期目標期間に比べ約 2 倍となっており、平成 29 年度にはのべ 500 件を超えるに至っている。

受託研究費については、熊本県からの依頼が最も多く、平成 26 年度の 4 件から平成 27 年には 8 件にまで倍増した。(平成 28 年度、平成 29 年度の減少は、熊本地震の影響によるもの。)(中期計画番号 33)

地方自治体や関連機関との連携による講習会、研修会については、単発に終わらず、継続的に取り組むことができている。その結果として、地域との連携がより深まり、単なる知識・技術の提供に留まらず、地域の問題解決につながる内容の提案もできている。また、保健学科教員が講師を務める高大連携事業の講義や各種講演会、研修会への参加をきっかけに、保健学科への進学を決めた高校生や大学院保健学教育部への進学を決めた社会人も散見されるようになった。(中期計画番号 32)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 我々の社会貢献活動成果について、国民や自治体は高い満足度を示しており、期待に応えている。我々の地域貢献活動成果について、地域住民や地域の中学校・高等学校からこれまでになく取り組みであると高い評価を受けている。

柴三郎プログラムを実施することで、中学生ならびに高校生を対象に最先端医学研究を指導している。この活動は、新聞などで取り上げられ、地域だけでなく九州地区の住民や地域の中学校・高等学校に反響をよんでいる。

(保健学科) 保健学科の教員が地方自治体等の審議会や委員会に参画する機会、あるいは講演会、セミナー、研修会の講師を依頼される機会は着実に増えている。また、国内外の研究機関との共同研究数や受託研究費の獲得数、獲得額も増加傾向にある。

先に述べた各種地域貢献活動については、地域住民や地域の高等学校から、これまでにない有益な取り組みであると高い評価を受けている。

観点 改善のための取組が行われているか。

(観点に係る状況)

(医学科) 授業担当教員に対して授業開放科目への積極的な参加を呼びかけ、授業開放科目を開設した。(改善計画) さらに、地域社会における実習を充実するために、新たに早期臨床体験実習 III を計画し、3年次の学生を熊本市内外の各病院診療所に1～数名配置し実習を実施した。(改善計画)(中期計画番号 31)

(保健学科) 現在のところ、社会貢献活動については改善の必要性はなく、引き続き継続して社会貢献に取り組んでいく。

地域貢献活動については、大学内、特に医学部附属病院との連携をより強化すべく、検討を進めている。また、地域貢献に関する取り組みを、よりわかりやすく学内外へ周知、広報するために、平成 28 年には保健学科の Web サイトを刷新した。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 地域社会のニーズの把握に努めるため早期臨床体験実習を拡充している。また、社会貢献活動の充実を図るために、授業解放や柴三郎プログラムを引き続き実施することで社会人への教育や、高校生の研究室への受け入れを行っている。

(保健学科) 熊本大学の基本方針に沿って社会貢献がなされており、関係者からの期待に応える成果を挙げていることから、改善の必要性はない。

地域貢献活動については、改善のための取り組みが功を奏し、保健学科から提供する授業数は年々増加し、受講者数も増えている。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目 大学の目的に照らして、社会貢献活動及び地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

大きく改善、向上している。

(医学科) 地域社会のニーズを把握するため、新たに早期臨床体験実習 III を計画し、熊本市内外の病院と診療所に学生を配置し、実習終了後のアンケートにより、地域医療の現場での意見やニーズの集約を行った。これにより、本学医学科の学生が、地域医療の現場のニーズを知ることができ、今後の地域医療や社会に貢献できる人材の育成につながると期待される。また、授業担当教員への授業開放科目への積極的な参加を促し、授業の解放に努め、学生以外の社会人が医学の知識を学ぶことができる環境を提供している。

本学が実施する高校生のための熊大ワクワク連続講義を担当し、新たにワクワク研究室訪問にて高校生の受け入れを行い、医師や医学研究者を志す人材の育成に努めた。

(保健学科) 社会貢献活動については、国内外の研究者や産学官連携による共同研究により、新たな看護ケアモデルや医療技術の開発に取り組んでいる。また、これらの研究の成果をもとに、保健学科の教員が地方自治体等主催の審議会や委員会に参画する機会が増え、その活動は県内外で高く評価されている。

地域貢献活動については、地方自治体、保健医療福祉機関、企業等と産学官連携による共同研究等を通して、地域の保健医療福祉機関や医療従事者との連携が深まってきており、その結果として、県内の自治体、保健医療福祉機関から講演会、研修会の講師を依頼される教員が増えている。

IV 国際化の領域に関する自己評価書

1. 国際化の目的と特徴

(医学科) 医学科では、アドミッションポリシーとして6項目で人材を求めているが、そのうち2項目で国際化の重要性が謳われている。すなわち、研究面では「科学的探究心が旺盛で、国際的視野で医科学研究を展開する意欲に溢れる人」、医療面では「社会に対する幅広い視野を有し、地域や国際社会における保健医療や福祉に深い関心を持つ人」である。平成26年に作成した熊本大学医学部医学科教育成果「F. 国際的視野」に記載するとおり、医学科学生が卒業時に「社会に対する幅広い視野を有し、本邦および国際社会における医療及び現状を理解する」を身につけることができるようなカリキュラムを策定している。

(保健学科) 保健学科では、海外研究・教育施設との情報交換や学術交流を推進できる能力、あるいは国際的に活動、貢献のできる医療人の育成を目指した教育を行っている。

[想定する関係者とその期待]

(医学科) 学士(医学)の学位授与に当たっても、教育成果として「社会に対する幅広い視野を有し、本邦および国際社会における医療及び現状を理解する」ことを達成すべく編成された教育課程を学修することを条件としている。医学科が想定する関係者は、在学生、外国人留学生、医療研究者・教育者であり、在学生及び外国人留学生に対して医療教育者が高度な医学教育を実施することによって、また、医療研究者が国際的な研究を行うことによって、社会へ還元することが期待される。

(保健学科) 想定する関係者は、本学科の在学生や本学で学ぶ外国人留学生、医療技術者(特に看護職、診療放射線技師、臨床検査技師)、医学・保健学の研究者・教育者である。これらの関係者への高度な教育、あるいはこれら関係者との共同研究を、その成果として社会に還元することが期待される。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

(医学科) 医学科のアドミッションポリシーでは、「科学的探究心が旺盛で、国際的視野で医科学研究を展開する意欲に溢れる人」、「社会に対する幅広い視野を有し、地域や国際社会における保健医療や福祉に深い関心を持つ人」を求めており、様々な媒体により受験生に有効に周知している。また、入学試験においては、平成28年度からは後期試験を廃止したことにより、全受験生が面接試験を受験するようになり、学力のみならず、医学部のアドミッションポリシーについての深い理解も有するようになったと考える。

これにより、国際的視野で医学を学ぼうとする学生が多くなっており、休業期間を利用した語学研修や学会発表への参加による海外渡航も年々増える傾向にある。また、基礎演習における海外研修を可能とし、海外の大学等とも学生交流・学術交流の協定締結も着実に増加している。

(保健学科) 保健学科の部局間交流協定校は第2期中期目標期間より1校増え、4大学となった。学生交流・学術交流を結んでいる韓国の高麗大学保健科学大学とは、教員・学生がお互いの大学を訪問し、教育・研究の交流を継続している。

また、学生には長期休暇を活用した語学研修プログラムへの参加、あるいは年に1回開催される本学所属の海外留学生との交流会への参加を推奨している。

【改善を要する点】

(医学科) 医学教育分野別評価基準に則した新カリキュラムを構築・実施しているが、講義の過密化に伴い学生の自由に使うことの出来る休業期間が圧縮されており、自主的な海外への留学や国際交流を行う機会が減少している。今後、時期を工夫するなど学生の自主的な活動を支援できるカリキュラムを模索する必要がある。

(保健学科) 部局間交流協定に伴う学生交流によって、国際的に活躍しようとする意欲のある学生を支援するため、今後は留学が単位取得や国家試験合格への障壁とならないようなルール、カリキュラムを確立していく必要がある。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 目的に照らして、国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点 国際化の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が広く公表されているか。

(観点に係る状況)

(医学科) 医学科では、「科学的探究心が旺盛で、国際的視野で医科学研究を展開する意欲に溢れる学生」、「社会に対する幅広い視野を有し、地域や国際社会における保健医療や福祉に深い関心を持つ学生」、「グローバルな視野をもち、国際的に活躍する研究者をめざすことができる学生」を育成するために教育目標及び学位授与方針に定め、専攻毎に学生便覧などに掲載している。また、このアドミッションポリシーは、熊本大学案内「がんばれ受験生」、入学者選抜要項、学生募集要項などの冊子で周知するとともに、医学部 Web サイトにも公開している。

また、オープンキャンパス時には、各種資料を配布するとともに口頭でもアドミッションポリシーを紹介している。

平成 26 年には熊本大学医学部医学科教育成果を作成し、「F. 国際的視野」として、医学科学生が卒業時に「社会に対する幅広い視野を有し、本邦および国際社会における医療及び現状を理解する」を身につけることが出来るようなカリキュラムの策定を行っているが、この教育成果は、医学部 Web サイトに公開するのみならず、医学科学生と教員に配布される「授業計画書」にも掲載をし、周知徹底をしている。

(保健学科) 保健学科では、グローバルな視野を持ち、国際的保健医療活動に貢献できる学生を育成するための教育目標、学位授与方針を定め、学生便覧に明示している。また、保健医療系共通科目のうち「国際医療・保健活動論」を必修とし、学生が海外に目を向けるための努力もしている。

部局間交流協定校との交流や熊本大学への留学生との交流会の詳細については、熊本大学並びに保健学科の Web サイトや生命科学研究部概要等において周知している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 医学科では、明確な方針・教育成果に基づき、国際化に対する学生指導が行われている。また、学生便覧や Web サイトなどを通して関係者へ確実に周知している。

(保健学科) 保健学科では、明確な方針に基づき、国際化を強く意識した学生教育が行われている。また、これらの取り組みについては、学生便覧や Web サイトを通して、関係者に確実に周知している。

| |
|---------------------------|
| 観点 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。 |
|---------------------------|

(観点に係る状況)

(医学科) 第2学年において教養教育における理系英語のみならず、医学英語の科目を必修科目として開催し、医学に特化した英語語彙や文章の基礎を獲得させている。また、第3学年での「基礎演習」及び「医療と情報」において、英語論文の検索の仕方や実際に英語論文を通読することを学ぶ。医学科では、カリキュラムの関係で個人による中長期の留学は難しいため、実習や夏季休業中において、海外の学会への参加や発表する機会の提供について各分野等へ働きかけている。

また、中国山東大学とは長年にわたる部局間交流協定を経て2009年大学間交流協定を締結し、平成29年度から山東大学の学生を毎年受け入れることを開始した。併せて、次年度に基礎演習期間中に3名の医学科学生を派遣し、国際交流を行う計画を行った。これを含め、平成29年度は次年度に向け、基礎演習の一環として、国立衛生研究所(NIH)、ハーバード大学、ハイデルベルグ大学、シンガポール大学などで計8名の学生が研究を実施できるよう計画を行った。更に、毎年1名程度の学生が、交流協定校であるリーズ大学(英国)やダラム大学(英国)などへ1年間の留学を果たしている。

基礎演習において各研究室へ学生を少人数配属させており、各教室に所属する留学生との交流も実施している。

なお、外国人留学生については、医師養成という教育内容の特性上、受け入れが難しく、大学間及び部局間交流協定に基づく受け入れは実現していない。

また、研究面においても、国際共同研究を通して最先端の研究を行っている。

(保健学科) 保健学科では、保健医療系共通科目のうち「国際医療・保健活動論」を必修とするとともに、長期休暇を活用した語学研修プログラムへの参加、あるいは年に1回開催される本学所属の海外留学生との交流会への参加も推奨している。

部局間交流協定を結んでいる韓国の高麗大学保健科学大学との間では、定期的に教員・学生同士の交流の場が設けられている。平成29年には、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の日本・アジア青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプラン」により高麗大学の大学生が来学し、放射線研究分野について、学生との相互交流を行った。

また、平成30年1月には、JSTの同事業によりハノイ国家大学外国語大学附属外国語英才高等学校の高校生が来学し、大学の授業体験、大学病院見学、保健所訪問を行い、日本の医療についての理解を深めるとともに、大学生との相互交流を行った。

研究面においては、外国人研究者の受け入れも含め国際共同研究への熱が年々増しており、第2期中期目標期間と比べ、その件数は倍増している。(中期計画番号40)平成30年2月にはタイ王国・ナレスアン大学保健医療学部において、「第2回保健学系国際シンポジウム」を開催し、研究発表と情報交換を行った。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 医学科では、教育の関し正課及び正課外活動を通して、また、教員も基礎演習や特別臨床実習を通して、着実に国際化・国際交流を図っている。

(保健学科) 学生は正課・正課外活動を通して、また、教員も国際学会への参加や海外との共同研究を通して、着実に国際化・国際交流を図っている。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

| |
|------------------------------------------|
| 観点 活動の実績及び学生・研究者の満足度から判断して活動の成果があがっているか。 |
|------------------------------------------|

(観点に係る状況)

(医学科) 教育において、国際化に向けての教育は確実に実施しており、語学研修や病院

見学・実習等での海外へ渡航する学生が増え、国際化に対する意識は向上してきている。また、海外の大学との部局間交流協定も着実に増加し、共同研究も着実に実施され、成果が上がってきている。

(保健学科) 国際化に向けての教育は確実に実施されていることで、語学研修等で海外へ渡航する学生が増え、国際化に対する意識も確実に向上してきている。また、海外の大学との部局間交流協定も数を増し、国際共同研究の成果も上がってきている。(中期計画番号40)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 学生の語学研修や病院見学や病院実習等での海外への渡航が着実に増え、国際化への意識が向上していること、国際共同研究も継続的に実施されており、国際化の成果は上がっている。

(保健学科) 学生の語学研修等を目的とした海外渡航は着実に増えており、国際化への意識も向上していること、教員も国際共同研究も継続的に実施していることから、国際化に向けた取り組みの成果は、十分上がっているものと考えている。

| |
|------------------------|
| 観点 改善のための取り組みが行われているか。 |
|------------------------|

(観点到に係る状況)

(医学科) 学生が卒業後に海外(特に米国)の病院で診療を行う際に必要となる資格について、米国 ECFMG が 2023 年以降、医学教育の国際認証を受けている大学の卒業生以外には受験資格を認めないとの宣言を受けて、日本国内で制定された医学教育分野別評価基準日本版が制定された。それに伴い、平成 25 年度より継続して評価基準に沿った新しいカリキュラムを策定し、現在第 5 学年である平成 26 年度入学生より新カリキュラムにそった教育を実施している。平成 31 年 6 月に認証評価の実地調査を受審する予定であり、それに向けての対応を継続的に行っている。認証されれば、海外における卒後の診療資格取得に当大学卒業生も認められることとなる。

評価認証に向けて、FD ワークショップにおいて継続的な対応を実施している。

(保健学科) 保健学科では、国際化推進委員会、保健学系運営委員会、教務委員会、国際化推進委員会において、海外大学との交流協定や国際化に関する教育・研究について継続的に検証、検討を行っている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 医科では、医学教育の国際認証への対応に向けて、カリキュラム委員会及び教育・教務委員会等で検討するとともに、医学部 FD ワークショップにおいても、これをテーマとして取り組んでおり、それぞれの委員会等が機能し、検証・検討している。

(保健学科) 国際化推進委員会、保健学系運営委員会、教務委員会、国際化推進委員会において、海外大学との交流協定や国際化に関する教育・研究について継続的に検証、検討を行っている。

4. 質の向上度の分析及び判定

分析項目 I 目的に照らして、国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていること。

改善、向上している。

(医学科) 国際交流に関する教職員、学生の意識は、正課・正課外や研究において確実に向上してきている。部局間交流協定校も着実に増えている。学生の海外渡航については、語学研修や病院見学・病院実習等のため渡航する学生が増えており、学生の国際化に向けての意識が向上している。学生の卒業後の海外での医療活動を円滑にするための準備も整いつつある。また、研究面においても国際共同研究が継続的に実施され、その研究成果も現れてきている。

(保健学科) 国際交流に関する教職員並びに学生の意識は、正課・正課外活動や研究を通して確実に向上してきており、部局間交流協定校も着実に増えている。語学研修等を目的とした学生の海外渡航が増え、学生の国際化に向けての意識も向上している。また、研究面においても、各教員の努力により国際共同研究が継続的に実施されており、その成果も上がってきている。

VI 管理運営に関する自己評価書

1. 管理運営の目的と特徴

(医学科) 医学科では管理運営組織として医学科会議が組織され、その下に各種委員会が設けられ、特に教学に関する管理運営を行っている。

また、事務部門については医学事務チームを置き、管理運営、教育研究の支援を行うとともに、委員会等にも参加し、医学科の管理運営にも参画している。

(保健学科) 教学及び管理運営に関する重要事項を審議・決定する場として保健学科会議が組織され、その下に各種委員会が設けられ、特に教学に関する管理運営を行っている。

事務部門については、保健学事務チームを置き、管理運営、教育研究の支援を担わせるとともに、事務職員がオブザーバーとして各種委員会に参加している。

[想定する関係者とその期待]

(医学科) 医学科を担当する教職員、医学科に在籍する学生、卒業生、医学部附属病院の教職員、実習受け入れ学外施設、臨床実習を通して関わった患者およびその家族、卒業後の臨床研修施設、就職先、地域社会など。医師及び医学者としてふさわしい知識と技能、倫理観を備えた人材を育成する。

(保健学科) 想定される関係者としては、本学科に所属する教職員や学生とその保護者、本学科の卒業生、非常勤講師や医学部附属病院を含む教育関連施設の各種医療職従事者、地域の住民や各種医療従事者が挙げられる。これら関係者の協力、共同作業のもと、医療従事者、医学研究者としてふさわしい知識や技術、倫理観を備えた人材を育成していく。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

(医学科) 医学科では、管理運営組織として医学科会議が設けられており、議長を担う医学科長のリーダーシップのもとに、医学科の目的である使命達成のための意志決定がなされ、迅速かつ円滑に運営が行われている。また、これらを支援する事務組織として生命科学系事務課医学事務チームが置かれ、その管理運営及び活動も円滑に行われており、優れている点として評価できる。

(保健学科) 管理運営組織として保健学科会議が設けられ、保健学科長のリーダーシップのもとに、その目的達成のための意志決定が行われており、迅速かつ円滑に運営が行われている。また、支援組織として保健学事務チームが置かれ、管理運営の一助となっている。

【改善を要する点】

(医学科) 医学教育を行うための複雑な組織及びカリキュラムを、少ない人数で管理運営が行われている。ただ、部局等の目的を達成するのに必要な事務組織体系ではなく、また十分な職員が配置されているとは言えない。

(保健学科) 教員組織、事務組織ともに、少人数での管理運営を余儀なくされており、十分な職員が配置されているとは言えない。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 管理運営体制及び事務組織が適切に整備され機能していること

観点 管理運営のための組織及び事務組織が、適切な規模と機能を持っているか。また、危機管理等に係る体制が整備されているか。

(観点到る状況)

医学科の教育を担当する教員等で構成する医学科会議・各種委員会、保健学科の教育を担当する教員で構成する保健学科会議・各種委員会において、各学科の目的達成、管理運

営上の特に教学に関する重要事項等を審議している。さらに、各学科会議で審議された事項の最終決定の会議として医学部運営会議が設置されている。

事務組織については、生命科学系事務課長の下、医学科においては、医学事務チームの総務・人事（計7名）、経理（計7名）、研究支援（計6名）、安全衛生（計2名）、医学系教務（12名）、事務支援センター（計3名）が配置され、保健学科においては、保健学事務チームの副課長1人、総務担当（5人）及び教務担当（5人）が配置され、医学部運営会議及び各学科会議等の事務支援を行っている。

危機管理体制については、本学が定める「熊本大学危機管理規則」及び各種危機管理マニュアル等に従い対応しており、本学部においても学部長、各学科長のスケジュールを担当事務でも共有するとともに、緊急時の連絡網を整備している。また、火災時の消防組織を編成しており、緊急時の対応を整備している。

その他、研究不正防止における「研究活動の不正行為の防止対策等に関する規則」、ヘルシンキ宣言等の趣旨に沿った倫理的配慮を図るための「生命倫理に関する規則」の遵守徹底を図り運用している。

また、本荘・大江事業場に設置された安全衛生委員会による職場巡視による指摘事項の改善など、安全管理の徹底を図っている。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

（医学科）管理運営のための組織として、医学科会議、医学部運営会議が設置されており、適切な規模と機能を持っており、また、事務組織による支援体制及び、危機管理体制についても適切に整備されている。

（保健学科）管理運営のための組織として、保健学科会議、医学部運営会議が設置されており、適切に機能している。また、事務組織による支援体制、あるいは危機管理体制についても適切に整備されている。

観点 構成員（教職員及び学生）、その他学外関係者の管理運営に関する意見やニーズが把握され、適切な形で管理運営に反映されているか。

（観点に係る状況）

教職員、その他学外関係者からの管理運営に関する意見・要望等について、医学科では、各種委員会及び事務等で把握し、保健学科では、各専攻や事務で把握し、意見・要望等の内容によって、該当委員会や学科会議等で分析・検討を行い、検討結果を説明するとともに、適切な形で管理運営に反映させている。

学生からの意見・要望等に関しては、毎年実施される「学長と学生代表との懇談会」に先立ち、医学科では、医学部長、医学科長、教育・教務委員長、学生委員長及び臨床医学教育センター教員が出席する「医学部長と学生代表との懇談会」において、保健学科では、学生委員会、運営委員会において、分析・検討し、その結果は学生代表に説明するとともに、適切な形で管理運営に反映させている。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

（医学科）教職員からの意見・要望等については、医学科会議や関係委員会等において随時収集・検討されている。また、学生については、意見・要望の収集から検討・反映に至るまでの体制が明確である。

(保健学科) 保健学科教職員・学生、その他学外関係者の管理運営に関する意見やニーズは、各専攻、委員会及び事務で把握しており、該当委員会や運営委員会等で適切な形で管理運営に反映している。

教職員からの意見・要望等については、保健学科会議や関係委員会等において随時収集・検討されている。また、学生からの意見、要望についても、収集から検討、反映に至るまでの体制は明確にされている。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

観点 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、研修等、管理運営に関わる職員の資質の向上のための取り組みが組織的に行われているか。

(観点に係る状況)

管理運営に関わる教職員の研修は、大学で開催される各種講習会及び研修会等のほか、学外の各種機関・団体等が実施するものにも参加させ、資質向上を図っている。また、事務職員においても大学が開催する研修等に積極的に参加している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

管理運営に関わる職員については、大学主催の研修会や説明会などに積極的に参加している。また、他大学主催で行われる医学部教務事務に特化した研修にも、毎年参加している。以上のことから期待される水準にあると判断する。

分析項目Ⅱ 活動の総合的な状況に関する自己点検・評価が実施されているとともに継続的に改善するための体制が整備され、機能していること。

観点 活動の総合的な状況について、根拠となる資料・データ等に基づいて、自己点検・評価が行われているか。

(観点に係る状況)

医学部単独での自己点検・評価は実施していない。熊本大学として行う自己点検・評価において1部局として実施している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

医学部では、熊本大学が行う自己点検・評価については、各学科会議・医学部運営会議など対応可能な体制を整備している。以上のことから期待される水準にあると判断する。

観点 活動の状況について、外部者(当該大学の教職員以外の者)による評価が行われているか。

(観点に係る状況)

毎年5月下旬～7月に開催する医学科後援会理事会及び保健学科後援会理事会において、現状報告と併せ医学部への意見・要望等についての意見交換を行っている。理事会で出された意見・要望等については関係委員会等において改善に向けて検討している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

外部者の意見・要望等を聞く機会を設け、出された意見・要望等に対しは、該当する委員会等で検討している。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

観点 評価結果がフィードバックされ、改善のための取り組みが行われているか。

(観点に係る状況)

自己点検・評価および外部者の評価結果、意見等については、医学科・保健学科の該当する会議等において検討を行い、改善のための取り組みを行っている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

評価・意見に対して、それぞれの学科に検討する会議体を整備し、改善のための取り組みを行っている。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

分析項目Ⅲ 教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること。(教育情報の公表)

観点 目的(学士課程であれば学部、学科または課程ごと、大学院であれば研究科または専攻等ごとを含む。)が適切に公表されるとともに、構成員(教職員及び学生)に周知されているか。

(観点に係る状況)

(医学科) 医学科の教育研究上の目的は、熊本大学及び医学科の Web サイト、学生便覧等に掲載し、構成員及び社会一般に広く公開・周知している。

(保健学科) 保健学科の教育・研究上の目的は、熊本大学及び保健学科の公式 Web サイト、学生便覧、並びに保健学科パンフレット等に掲載し、構成員及び社会一般に広く公開、周知している。

(出典：保健学科パンフレット)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

目的がインターネットや冊子等を活用し適切に公表されるとともに、構成員に周知されている。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

観点 入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表・周知されているか。

(観点に係る状況)

(医学科) 入学者受け入れ方針としてのアドミッションポリシー、教育課程の編成・実施方針としてのカリキュラムポリシー、学位授与方針としてのディプロマポリシー、及び、

組織の目的である医学部医学科の使命と、卒業する際に獲得しているべき能力として教育成果（コア7項目と付属する50の小項目）を、医学部 Web サイト及び入試広報等により、学内外に向けて適切に広く公表・周知している。

（保健学科）アドミッション・ポリシーは、本学 Web サイト、及び入試広報等により、学位授与方針は保健学科 Web サイトにより、学内外に向けて適切に広く公表、周知している。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

Web サイト、大学案内冊子、パンフレット、募集要項やオープンキャンパス等を活用し、広く学内外に公表・周知している。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

観点 教育研究活動等についての情報（学校教育法施行規則第 172 条に規定される事項を含む。）が公表されているか。

（観点到係る状況）

医学部の教育研究に関する活動状況は、熊本大学・医学部 Web サイトに掲載し、学内外に広く公表している。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

熊本大学及び医学部 Web サイト等を活用し、広く学内外に公表・周知している。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

分析項目 VI 教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。（施設・設備）

観点 教育研究活動を展開する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか。また、施設・設備における耐震化、バリアフリー化、安全・防犯面について、それぞれ配慮がなされているか。

（観点到係る状況）

（医学科）講義室等は本荘北地区の医学教育図書棟に集約されており、1・2階に附属図書館医学系分館を備え、3階以上に講義室4室、実習室3室、ゼミ室2室、情報演習室1室が配置され、専門教育の講義・実習を行っている。

また、附属の臨床医学教育研究センターにはチュートリアル室15室があり、チュートリアル実習や臨床実習入門などの少人数学習を行っている。

バリアフリーの対策については、ほとんどの建物においてスロープやエレベーターが設置されている。

安全・防犯面については、全ての建物が機械警備を行っており、夜間・休日は部外者の入室はできないようになっている。さらに、講義室がある医学教育図書棟及びチュートリアル室がある臨床医学教育研究センターには、入口付近に防犯カメラを設置し、より防犯性を高めている。また、本荘地区内の警備については、警備会社との契約により、昼夜ともに定期的に警備員が巡回している。

（保健学科）講義室8、セミナー室8、実験実習演習室37、研究室11、情報教育を中心に行うためのパソコン室2、自習室4、ならびに図書室1を備えている。自習室、パソコン

室は、22時まで学生に開放しており、学生の自主学習時間を増やすことに一役買っている。
 バリアフリー対策に関しては、C棟、E棟にそれぞれエレベーターが設置されている。
 安全・防犯面については、建物の機械警備による夜間・休日の入館制限、防犯カメラの設置、警備員の構内巡回などを行っている。また、熊本地震をきっかけに、平成28年度末に建物の耐震工事を行った。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 教育研究活動に必要な施設・設備は計画的に整備され、有効に活用されている。臨床医学研究棟の建て替えも完了し、基礎及び臨床研究・教育の拠点としてふさわしい施設となっている。

(保健学科) 教育・研究に必要な施設、設備は、最低限整備されており、それらをフルに活用している。また、耐震化を含む安全・防犯面においても整備が進み、エレベーターの設置などバリアフリー対策も進んでいる。

観点 教育研究活動を展開する上で必要な ICT 環境が整備され、有効に活用されているか。

(観点に係る状況)

(医学科) 本荘地区には、全学的な教育・研究用のネットワークが構築されており、数多くの無線 LAN アクセスポイントも設置されている。また、情報演習室に総計 136 台の PC 及び 3 台のプリンターが配置され、授業内外で学生が利用できるようになっており、ICT 環境を有効に活用している。

(保健学科) 保健学科内に必要不可欠な数の無線 LAN アクセスポイントを設置し、学科内のインターネット環境を整備した。また、2つの情報演習室(A204、B201)を整備し、総計 82 台の学生用コンピュータを設置したことで、教育環境の充実につながった。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

有線 LAN 環境に加え、無線 LAN 環境が網羅されており、教職員・学生は、整備された環境の下で研究・教育に有効に活用されている。

以上のことから期待される水準にあると判断する。

観点 図書館が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されており、有効に活用されているか。

(観点に係る状況)

(医学科) 附属図書館医学系分館は、延床面積 2,440 m²、閲覧座席数 226、和書 65,616 冊及び洋書 107,662 冊の蔵書である。視聴覚資料は 120 点、PC 36 台を備え、年間開館日数及び学内貸出冊数は資料のとおりである。

医学系分館は 2 名の専任職員及び 2 名の臨時職員で運営されている。また、館内には希望図書申込書が設置されており、学生が希望する図書を購入されるシステムになっており、利用者の要望に応じ、適切に対応出来る体制が整っている。

電子ジャーナルにおいては、全学的に契約がなされており、そのダウンロード数は 447,323 である。

(保健学科) 保健学科内にも図書室を設置しており、附属図書館・中央館及び医学系分館との連携により、保健学科の教職員、学生のニーズに対応したサービスを提供している。保健学図書室には主に保健学に関連した図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集・整理、配架されており、閲覧、貸し出しを行っている。

全学的に契約がなされている電子ジャーナルについても、研究・教育両面に有効活用している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 全学の図書整備の方針に従って、図書は職員により系統的に収集・管理されており、有効に活用されている。

(保健学科) 学科内に図書室が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されている。国家試験コーナーや DVD の整備、学内ネットワークにアクセスできる PC、専用プリンター、ICT 環境の整備により、学生・教員の利用しやすい環境が整っており、教職員・学生に有効に活用されている。

| |
|---------------------------------|
| 観点 自主学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。 |
|---------------------------------|

(観点に係る状況)

(医学科) 学生の自主学習を円滑に進めるために、授業時間以外の講義室及び PC ルームを開放するとともに、上位の学年には自習室を設けている。また、臨床医学教育研究センターのチュートリアル室 (15 室) を授業等で使用しない時間帯を利用して、6 年生のグループ学習室として運用している。

(保健学科) 保健学科では、自習室 (4 室) 及び情報演習室 (2 室) を整備するとともに、講義室・演習室を開放している。また、各自習室には無線 LAN のアクセスポイントを設置し、インターネット環境も整備している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

(医学科) 限られた施設及び環境の中で、学生の利便性等を最大に考え、有効な運用を行っており、期待される水準にあると考える。

(保健学科) 限られた施設及び環境の中で、学生の利便性等を最大に考え、有効に運用しており、期待される水準にあると考える。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目 I 管理運営体制及び事務組織が適切に整備され機能していること。

質を維持している。

意志決定を行える会議体は適切に整備されており、それぞれにおいて審議事項も明確化されている。事務組織においても各学科に担当を配置するなど、適切な整備が行われ、管理運営にあたっている。また、事務職員は全学や学外で実施される講演会、セミナー及び研修等に積極的に参加しており、スキル向上に努めている。さらに、危機管理に関しては、全学規則等を周知・徹底し教職員の意識向上を図っている。

- (2) 分析項目Ⅱ 活動の総合的な状況に関する自己点検・評価が実施されているとともに、継続的に改善するための体制が整備され、機能していること。

質を維持している。

医学科では、医学教育分野における国際認証受審に向けて、活動の総合的な状況に関する自己点検・評価を細目に分けて担当チームを構成し実施している。保健学科単独では自己点検・評価は実施していないが、全学的な自己点検・評価において実施している。また、医学部運営会議、医学科会議及び保健学科会議などを主体として、継続的に改善するための体制は整備されている。また、後援会等から寄せられた意見・要望等については、該当する委員会において改善のための検討体制が整備され、効率的に機能している。

- (3) 分析項目Ⅲ 教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること。(教育情報の公表)

改善・向上している。

熊本大学及び医学部の Web サイトや冊子等を活用し、アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーをはじめ教育研究活動の情報が適切に公表されている。

- (4) 分析項目Ⅳ 教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。(施設・設備)

質を維持している。

(医学科) 講義室、実習室は医学教育図書棟に集約・整備され、有効に活用されている。附属図書館医学系分館、医学科教務事務室及び健康相談室(保健室)も同建物に配置され、学生及び教職員の利便性が図られている。

(保健学科) 講義室、演習室等は学生ファーストの視点で整備され、有効に活用されている。特に保健学科内の図書室は、学生の意見に基づいて整理を行ったことにより、専門書の貸出数も増えた。